

呼吸器腫瘍内科

(スタッフ)

部長 : 森永 亮太郎
主任医師 : 久松 靖史
後期研修医 : 駄阿 徳太郎 (2020. 7月から)

2014年の呼吸器腫瘍内科新設以来、しばらく一人診療体制が続いておりましたが、患者の増加に伴って徐々にスタッフも増員となっています。2017年3月より久松靖史が、2020年7月より駄阿徳太郎が加わって、現在は3人体制で診療しています。

(診療実績)

2020年の新入院患者数は382名であり、ここ数年は毎年50名ほど増加しています。内訳を疾患別にみると、肺がんがその3/4を占めており、肺炎(がん治療中に併発)、胸腺/胸膜悪性腫瘍、原発不明がん、その他のがん腫が続くかたちとなっています(図)。

外来患者数も延べ3,335名と昨年と比較し約700名増加していますが(表)、その背景として抗がん化学療法の治療の場が入院から外来へと移行していることが考えられます。また当院の外来化学療法室が9から20床へと大幅に増床されたことも、この動きをさらに加速させています。現在、当科の化学療法件数の7-8割が外来での治療となっています。

呼吸器腫瘍内科では、手術による根治治療が難しい進行肺がんの患者を主な対象として薬物療法による治療を中心に診療を行っていますが、進行期のがん患者は痛みをはじめとしたさまざまな苦痛を抱えておられます。当科の医師のうち2名は「緩和ケアセンター」のスタッフを兼任していますので、患者の抱える苦痛を極力軽減し、より有意義な時間を過ごしていただけるように、多職種で構成されるセンターのスタッフと協働しながら緩和ケア診療をがん治療と並行して提供できるように努めています。

他のがん腫と同様に肺がん領域におきましても免疫療法をはじめとした多くの新薬が臨床現場に導入されており、「診療ガイドライン」の改訂も頻繁に行われています。そのような状況のなかで、一人一人の患者に現時点での最適な治療を届けることができるように心がけています。

(今後の方向性)

肺がんに対する薬物療法の成績は、新薬の臨床導入等により徐々に改善されつつありますが未だ満足で

きるレベルには至っていません。私どもは西日本がん研究機構(WJOG)や九州肺癌機構(LOGiK)、胸部腫瘍臨床研究機構(TORG)といった臨床試験グループの一員として臨床研究に携わっています。微力ではありますが、将来の新しい治療法の構築に尽力していきたいと考えています。

分子標的治療、免疫療法と肺がん診療を取り巻く環境はめまぐるしく進歩してきていますが、そう遠くないうちに当院においても「がんゲノム医療」に直接携わっていくことが予想されます。新しいがん治療に施設全体として取り組んでいくなかで、私どもも他診療科・スタッフと力を合わせて、より良い医療の構築に尽力していきたいと考えています。

(文責: 森永亮太郎)

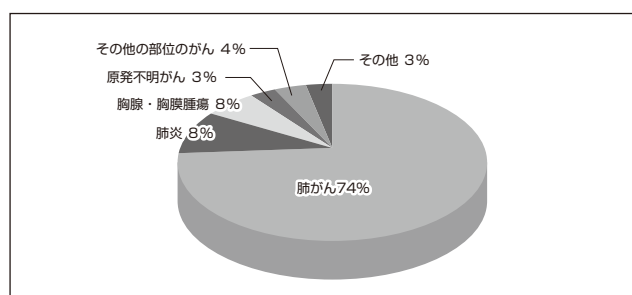


図 2020年 入院患者内訳

表 診療実績 (2018-2020年)

年	2018年	2019年	2020年
新入院患者数 (人/年)	279	330	382
平均在院日数 (日)	11.6	12.6	12.6
外来患者数 (延べ数、人/年)	2,279	2,625	3,335